

南条の生い立ちとあゆみ

平安時代、この地方は佐橋庄とよばれ、皇室の所領であった。鎌倉時代の承久の乱（1221）以後、幕府は南庄に地頭を置いて支配し、北庄は皇室が預所を置いて支配した。武士は南庄を南条といい、現在の南条は南庄の一部である。南条の初見は文永7年（1270）の毛利経光の相続状である。むかし、南条は馬の放牧地であったのか、駒岡村とよばれた。天和3年（1683）検地帳に、上南条地内の松右衛門（馬場コトエ家の人）の畑地として「こまおか」の名が残っている。江戸時代になると下南条・追田・上南条を合せて南条村といった。下南条は本村、上南条は荒屋敷（新屋敷）とよばれた。

元禄（1688-1704）のころ、新田開発により鯖石川沿いに無民家の南条新田村が誕生した。同村は明治10年（1877）に南条村と合併。

同34年（1901）の町村合併のとき、県参事会は「南条村・北条村・小淵村・広田村・長鳥村を合併して東鯖石村とする」という意見であった。これに対して郡参事会や県知事は「南条村は中鯖石村に合併させ、北条・小淵・広田・長鳥の4村を北条村とする」という考えであった。最終的には、明治34年11月1日、南条村127戸は前記4カ村と合併し、北条村が誕生した。

それから55年後の昭和32年（1957）10月1日、町制施行により北条村は北条町になる。同46年（1971）5月1日には北条町は柏崎市に合併した。

文治2年（1186）	佐橋庄の名の初見（吾妻鑑）
宝治元年（1247）	毛利経光が鎌倉から佐橋庄南条へくだる
文永7年（1270）	南条の名の初見（毛利経光相続状）
正中元年（1324）	鎮城菅原神社を勧請して天満宮を建つ
建武2年（1335）	毛利時親が曾孫元春を安芸高田市へ差し向け、吉田庄への奪回をはかる
建武3年（1336）	京都の毛利時親、南条の親衛が安芸へくだる（安芸毛利の起こり）。親衛の弟憲広（道幸）が南条に残り越後毛利を支配する
康正3年（1457）	南条城主南条信が専称寺に土地を寄進
永禄2年（1559）	普広寺7世人安全佐和尚が正雲寺を創建する
天正10年（1582）	南条城主南条勝衛父子が魚津城で討死
慶長3年（1598）	会津移封により南条城が廃城になる
寛永年中（1624-44）	市川喜七・佐兵衛が鯖石川沿いを開墾して南条新田村（18石1斗9升2合）が誕生
天和3年（1683）	最初の検地が行われる
正徳元年（1711）	村鑑に「追田村・荒屋敷村（上南条）・本村の3カ村を合せて南条村と申す」とみえる
明治13年（1880）	刈羽神社をはなれ、上南条は佐橋神社、追田は十二神社を氏神様とする
明治34年（1901）	県参事会の意見により北条・小淵・広田・長鳥・南条の5村が北条村になる（県知事は北条村を東鯖石村と改称、郡参事会は南条村を中鯖石村に編入するという意見であった）

南条が生んだ人物

曹洞宗の紛争解決に尽力した名僧 星見天海



天海は曹洞宗の紛争解決に貢献した名僧である。天保4年（1833）、農家の3男として生まれ、名を万治といった。父は下南条の星野治兵衛、母は上南条の関藤助の娘のりといった。9才のとき、柏崎市平井の福勝寺、俊龍和尚に入門。翌年得度し、蟠龍といい、のち天海・半雲などと称した。19才のとき、師匠の命で松之山陽光寺大納恩和尚に従い、関東へ修行の旅に出る。27才のとき、金沢市の名刹天徳院の奕堂和尚（のちの永平寺貫主）に入門し、森田梧田（のちの永平寺貫主）らと学ぶ。34才のとき眼病を再発し、帰郷。この15年間の修行で出世の道が開かれる。明治3年（1870）37才のとき、師匠俊龍の死亡により福勝寺住職と

なる。その後、柏崎香積寺・村松町慈光寺の住職を歴任。同18年（1885）53才のとき、総持寺貫主畔上樸仙の特選により神奈川県足柄山の名刹最乗寺4世住持となる。同34年（1901）69才まで16年間住職をつとめ、平井福勝寺に帰る。

明治25年（1892）、井上馨が内務大臣に就任し、曹洞宗の内紛解決に乗り出した。曹洞宗は、開祖道元が開いた越前永平寺と永平寺3世の弟子瑩山が開いた能登総持寺が管長の座をめぐる争っていた。翌年、井上は両派から秋田大円寺の服部元良と最乗寺の星見天海を選び、管長代行に任命した。天海は「在山81日、他は東京往復、他行に費やせり」といって、両派の和解に奔走した。管長選任の争いが解決したのは、井上退任2カ月後の明治27年12月であった。

天海は仏道にきびしく、子弟の指導には情愛をもつてのぞみ、聖俗広く信望の厚い人であった。大正2年（1913）81才のとき、平井福勝寺で生涯を終えた。遺骨は平井福勝寺、足柄山最乗寺、下南条墓地に分骨埋葬されている。

南条が生んだ人物

B29撃墜の名手 陸軍大尉 樫出 勇

大正4年（1915）、樫出長造（屋号：どばし）の4男として生まれた。航空兵にあこがれ、昭和9年（1934）、定員70名に対し、2万余名が応募した所沢の陸軍飛行学校1期生に入学。同14年（1939）、ノモンハンでソ連機を5機撃墜した。その後、「隼」の搭乗員となり南方に転戦したが、本土防衛に召還され、山口県の飛行第4戦隊長になる。戦闘機「屠龍」に搭乗。同19年（1944）、本土初空襲。翌年、広島に

原爆を投下したB29爆撃機は、驚異的な性能をもつ空の怪物であった。樫出はこれを26機も撃墜し、米軍から「B29キラー」として恐れられた。

同20年、陸軍初の武功章を授章し、世界の撃墜王になった。米国の「世界名パイロット列伝」は日本人3名を載せ、その1人が樫出であり、世界から「エースパイロット」の称号を贈られた。

晩年は柏崎の鹿島に住み、平成15年（2003）88才で亡くなった。



① こまかえし 駒返橋



通称「こまばし」という。戦国時代、北条と善根の殿様は同じ一族でありながら仲が悪かった。北条 丹後守は娘を毛利大方之助に嫁がし、婿入りと称して大万之助を北条城に招いて風呂で殺した。善根の城兵がこの橋まで迎えに来ると、大万之助が殺されたことを知り、駒（馬）を引き返したという。

② 刈羽神社 (天満宮)



正 中元年(1324)に頼朝の菅原神社の分霊を勧請して創建され、文明4年(1472)長尾景信により社殿が再建されたという。その後、南条駿河守の庇護を受ける。菅原道真をまつり、天満宮と称された。明治初年に刈羽神社と改称。明治13年(1880)9月まで下南条・追田・上南条の氏神様であった。境内地は752坪。

③ しょうんじあと 正雲寺跡



曹洞宗正雲寺は、永禄2年(1559)に北条の普広寺7世人安全佐和尚により創建。南条駿河守の祈願所とされたが荒廃し、延宝8年(1680)に普広寺の芳秀和尚が本堂・庫裡を建立し、中興開山となる。境内地は726坪。本堂は間口8間・奥行5間2尺。昭和57年(1982)3月、第21世毛利天正が僧籍をはなれ、長野県に転住し、廃寺となる。

④ じゅうおうどうあと 十王堂跡



開基は正雲寺14世佛海大和尚。拈華庵といい、通称、十王堂という。本尊は釈迦牟尼佛、脇座は十王佛10体である。7世円山随乗尼、8世祖法梅岳尼、9世祖岳梅元尼、10世祖典梅城尼(石口・曾地の人)が在庵した。梅城尼は2才5カ月のときから34年間在庵し、昭和41年(1966)4月、白根の青蓮庵へ転住し、廃庵になる。

みなみじょう

南条いにしえロード



マップイラスト・表紙絵：白金寿弥

南条が生んだ人物

三余堂を開いた 藍澤南城



寛政4年(1792)に生まれ、幼名文蔵、名は祇、通称要輔といった。

父は加納の人で号を北溟といい、母は南条の関俊彦家の人で班という。父は加納の寺澤石城、江戸の片山兼山に学び、片貝の朝陽館で学問を教えた。南城6才のとき父が病死し、父の死後4日目に妹佐和が生まれた。母子は片貝から南条に帰る。15才のとき江戸へ出て松下一斎の葛山塾で儒学(折衷学)を学ぶ。

文政2年(1819)28才のとき帰京した。妹の説得で南条に留まり、翌年三余堂を開いた。三余堂は明治6年(1873)、学制施行まで53年間続いた。江戸復帰の夢を捨て、寒村の子供たちを育てようと決意して南城と号す。素朴・中庸・無差別を旨とする人柄を慕い、遠近千余人、県下最多の塾生が三余堂で学んだ。万延元年(1860)、69才で亡くなる。

⑨ 藍澤南城の墓碑



八石山西麓高台に藍澤家の屋敷跡がある。その一角に学塾三余堂があった。三余堂から7、8分ほど登った山腹に藍澤家の墓があり、南城先生の墓もある。藍澤南城は母妹の仕送りで江戸遊学し、のち三余堂を開き、遠近千余の門弟を世に送り出した。蒲原の大野耻堂と並ぶ大教育者である。

⑧ さんようどうあと 三余堂跡



三余堂は文政3年(1820)藍澤南城が29才のときに開いた学塾である。

明治6年(1873)学制施行により閉塾するまで53年間、遠近千余の塾生が学んだ。南城は、冬は歳の余り、夜は日の余り、雨天は時の余りといい、これを三余と称した。冬・夜・雨天は読書の好機であるとし、時間を無駄にせず学問に励むよう説いた。塾舎は間口5間・奥行15間の総2階建。寄宿舎があった。修業年限は予科年・本科3年。月謝は予科15銭・本科20銭。寄宿料は月2円40銭。学風は素朴で、家柄の差別はしなかった。

⑦ 城址殉難者碑



妙姫庵3代山岸貞順は明治31年(1898)5月に城址殉難者碑を建立した。この碑は明治18年(1885)に佐橋神社の境内から出土した頭骨を供養したものである。頭骨は北条城と善根城の争いで犠牲になった人であろうと思われていた。平成9年(1997)、関俊彦家から祖父周三郎が大正12年(1913)に山口県毛利公爵家へ送った書簡の写しが発見された。それは周三郎が毛利経光の頭骨ではないかと思ひ、毛利家に照会した書簡である。

頭骨が出土した地点の杉の巨木(伐採されて現在は切り株を残すのみ)の年輪と毛利経光が年代的に合致するので、経光の頭骨であるかも知れない。

⑤ 毛利氏の城館址と佐橋神社



八石山の西麓に杉林の丘陵がある。古来、そこに佐橋庄を支配した地頭毛利氏の居館があったと伝えられている。戦国時代を迎えると、毛利氏の子孫である南条氏がその跡に居城した。

慶長3年(1598)、南条氏は会津、その後米沢へ移った。地元の関俊彦家の先祖が城跡の荒廃を恐れ、天和3年(1683)に神明宮を建立してその保護につとめ、庄屋八左衛門が保管していた検地道具を奉納した。

天和3年検地帳に、城跡は上畑1反2畝4歩(364坪)、地主は次五兵衛と記されている。また正徳元年(1711)南条村指出帳に「現在は畑になっていて、本丸は東西10間、南北25間。二ノ丸はない」とある。城跡の南麓に刀砥ぎ場があり、南200mあたりには古屋敷(天和検地帳に1町8反26歩。7,334坪)と称する水田がある。

慶応元年(1865)、前出の神明宮は佐橋神社と名を改めた。そうして上南条の住民は明治13年(1880)9月から刈羽神社の氏子をはなれ、佐橋神社を氏神様とした。

⑥ みょうきあんあと 妙姫庵跡



弘化元年(1844)、藍澤南城の妹佐和47才が得度して玄妙と改め、妙姫庵を開いた。佐和の父は加納の藍澤五三郎の子要助(北溟)。母は南条の関治五兵衛(関俊彦家の人)の娘班。寛政4年(1797)南城6才のとき父が亡くなり、佐和は父の死後4日目に生まれた。母子は片貝から南条へ帰り、佐和は母を助け、南城の江戸遊学の仕送りをした。玄妙(佐和)は慶応元年(1865)69才で入滅。妙姫庵は初代玄妙・2代妙真・3代貞順・4代厚順・5代良仙・6代仙宗が在庵し、通称観音堂とよばれた。初代・2代・3代の墓が庵前にある。仙宗が昭和46年以後に小出の柳原寺にうつり、廃庵になる。堂は間口5間・奥行4間3尺。境内地は141坪。